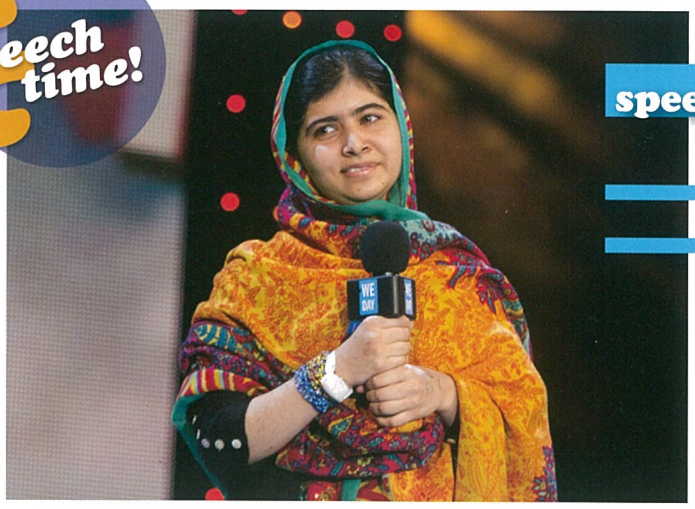
speech time!



speech by

マララ・ユスフザイさん

Malala Yousafzai

2014年12月10日　当時17歳

動画で見られるよ!

https://youtu.be/0p7EMYgIoLo

「すべての子どもに教育を」（ノーベル賞受賞スピーチ）

親愛なる姉妹、兄弟たち、今日はわたしにとって、すばらしく幸せな日です。おそれ多いことにノーベル賞委員会は、わたしをこの重要な賞に選んでくださいました。

今回の賞は、わたしだけのものではありません。教育を望みながら忘れ去られたままの子どもたち、平和を望みながらおびやかされている子どもたち、変化を求めながら声をあげられない子どもたちへの賞なのです。

わたしは彼らの権利を守るため、彼らの声を届けるために、ここへ来ました。いまは彼らをあわれむときではありません。教育の機会をうばわれた子どもたちを目にしなくなるよう、行動をおこすときです。

人びとはわたしを、いろんなふうによぶのだと知りました。

ある人は、「タリバンに撃たれた少女」と。

ある人は、「自分の権利のためにたたかう少女」と。

いまは「ノーベル賞受賞者」ともよばれます。しかし、弟たちはいまもわたしを「うるさい、いばった姉さん」とよびます。

わたしの村には、いまも女の子のための中学校がありません。わたしの友だちや姉妹たちが教育を受けることができ、ひいては夢を実現する機会を手に入れることができるよう、中学校を建てたい。これがわたしの願いであり、義務であり、いまの挑戦です。

親愛なる兄弟、姉妹のみなさん。おとなの世界の人たちは理解しているのかもしれませんが、わたしたち子どもにはわかりません。どうして「強い」といわれる国ぐには、戦争をおこす力があるのに、平和をもたらす力はとても弱いのでしょう。

なぜ、銃をあたえるのはとても簡単なのに、本をあたえるのはとてもむずかしいのでしょう。

戦車をつくるのはとても簡単なのに、学校を建てるのがとてもむずかしいのはなぜなのでしょうか？

現代にくらすなかで、わたしたちはみな、不可能なことはないと信じています。人類は45年前に月に到達し、まもなく火星に着陸するでしょう。それなら、この21世紀に、すべての子どもに質の高い教育があたえられなければなりません。

MESSAGE

メッセージ

伊藤和子さん（弁護士、ヒューマンライツ・ナウ事務局長）

「女の子にも教育を」と声をあげ、銃撃されてもあきらめなかったマララさんの勇気は、世界の人びとをはげましました。戦争にはばくだいなお金が使われるのに、教育への支援はあまりに少ない、いまの世界。でも彼女は屈しません。彼女は、この瞬間も教育を受けられず、夢を絶たれようとしている子どもたちを代表して声をあげているからです。すべての子どもに質の高い教育を、という彼女の挑戦は、子どもたちに夢をかなえる力をあたえ、少女たちが自分の人生を生きる道をつくり、平和な社会の土台をつくるものです。

ぼくが生まれるよりずっと前、チェルノブイリというところで原発の事故があったそうです。

そのとき出てしまった放射能のせいで、病気になってしまった人がいたり、そのあと生まれてきた子どもたちに障がいが増えたことを、福島での原発事故のあと知りました。

いまの日本の放射能は、からだにどんな悪いはたらきがあるかわからないそうですが、ぼくは放射能がとてもこわくなりました。

ぼくは思いました。なんで、前にこういう事故がほかの国であったとき、おとなはいつか自分の国でも、原発が危なくなると思わなかったのだろう、と。

ぼくの夢は、お医者さんになることです。一生懸命勉強して、子どもや地球を守れる、立派なおとなになりたいです。

最後までぼくの話を聞いてくださって、ありがとうございました。

MESSAGE

メッセージ

後藤弘子さん

（ヒューマンライツ・ナウ副理事長、千葉大学教授）

原発事故の被害を世界に知ってもらうため、日本のNGOが中心になり、避難した家族にニューヨークで体験を話してもらう場をつくりました。凱聖くんは元気いっぱい、でもシャイな男の子。会場で彼や小さな妹さんがたいくつしないかということだけを、わたしは気にしていました。彼のどうどうとしたスピーチを隣で聞きながら、胸がいっぱいになりました。さっきまで無邪気に遊んでいた彼に、本来する必要のない苦労や心配をかけていることがわかったからです。彼のメッセージは日本のテレビでも報道され、多くの人に届けられました。けれども、その後日本は、事故の影響を低く見つもり、何もなかったかのようにまた原発を動かそうとしています。凱聖くんがおとなになるまでに少しでも彼の問いかけにこたえた社会をつくり、手わたす責任をあらためてかみしめています。